

サイレント時代の喜劇



サイレント時代の喜劇は、チャールズ・チャップリン(1889-1977)やバスター・キートン(1895-1966)など、その「黄金時代」に活躍したスターたちに絡めて語られることが多いが、実際には映画史のごく初期から存在する、人気の高いジャンルだった。映画発祥の時代から数多くの作品が、場面切り替えなしの視覚ギャグを展開した。たとえばルイ・リュミエール(1864-1948)監督作『水をかけられた散水夫』(1895)では、庭師が水撒き用ホースのせいで何度も災難に見舞われる。これら初期の実験的作品は大いに成功したが、サイレント時代に高い人気を誇った多くの俳優たちは、今ではほとんど忘れ去られているか、チャップリンやキートンの陰に隠れてしまっている。『要心無用』(1923、上)におけるハロルド・ロイドの無謀な演技や、『南北珍雄腕比べ』(1926)のレイモンド・グリフィスなどは、よくできた定番ギャグの典型例である一方で、ジャンルを代表する俳優であっても徐々に世間から忘れられてしまう現実を思い出させる。

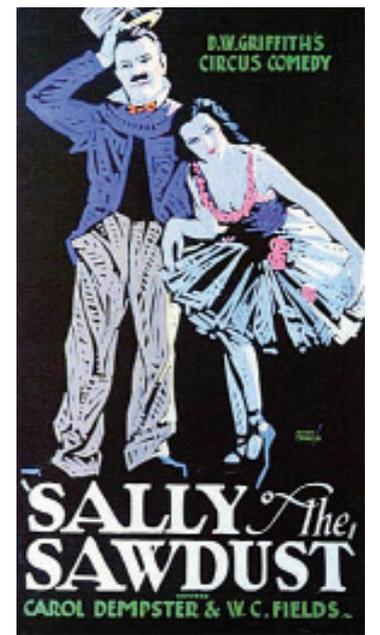
サイレント時代初期、ヨーロッパでは、人を笑わせる芸が論理的展開と型を備え始め、1920年代にはこの分野で早くから活躍していたアンドレ・ディードや、特に人気の高かったマックス・ランデーなどの喜劇俳優によって広まっ

ていった。しかし、後にサイレント喜劇の定義となる表現を生み出したのは、マック・セネットのキーストン・スタジオ社であった。1912年設立の同社は、コメディアン集団「キーストン・コップス」に観客の喜ぶものを演じさせるという形で、産業規模の喜劇映画を制作し始めた。「コップス」ものはほんの数日で制作されることが多く、ドタバタの追跡シーンの連続で成り立っており、びっくりするようなスタントが盛り込まれ、大小さまざまな体軀のアンバランスな俳優たちが登場する。セネットは、一連の視覚ギャグ、現実離れたシナリオ、個性的な外見を持つ性格俳優たちを頼みとした、画面上で見る喜劇の一形式を作り上げるのに重要な役割を果たした。キーストン社の映画は短命で、その時々話題をテーマにしたものや、有名な映画の猿まねをした短編映画が毎週何本も新しく作られた。ハリウッド初の喜劇スター俳優を育て上げたのもセネットその人で、マック・スウェイン、フォード・スターリング、メイベル・ノーランド、ロスコー・「デブ君」・アーバックル、ハリー・ラングドン、チャールズ・チャップリンなどは、いずれもキーストン社の映画で有名になった。

チャップリンはキーストン社の代わり映えのしないドタバタ喜劇からの脱出を図り、同時代の傑出した喜劇俳優となり、ついには週給1250米ドルを要求するほどのスターになった。『黄金狂時代』(1925、→p.64)はサイレント時代に最高レベルの売上を達成した作品で、『キッド』(1921、右上)同様、常に彼の頭から離れないテーマの数々を掘り下げた作品である。なかでも貧しさの与える影響というテーマは、貧しい環境に育ったチャップリン自身の背景と響き合う。

キートンは元子役であり、アクロバットやヴォードヴィルで活躍していた。その笑いは無表情な顔と、馬鹿馬鹿しいほどに優れた運動神経を発揮する様子とのコントラストから引き出されるもので、チャップリンの笑いとは異なっていた。キートンのおかげで、体を張っての喜劇は詩的とも言える高みに至った。大がかりであればあるほど危険な、複雑化する一方の舞台装置の中で、考え抜かれた巧みな演技を見せることで成し遂げられたのだ。

トーキーの到来は多くのサイレント喜劇俳優のキャリアをがらりと変えてしまった。チャップリンは1940年の『独裁者』まで台詞を用いることを拒み、『モダン・タイムス』(1936)のように効果音を使う方を好んだ。キートンは台詞主体の喜劇に馴染めず、ハロルド・ロイドやハリー・ラングドンなどは、彼らの面白さに備わっていた熱気や魅力の大半を失った。一方W・C・フィールズは舞台俳優時代に当意即妙のやりとりを呼び物としていたため、サイレントでは『曲馬団のサリー』(1925、右)をはじめとする複数の作品をヒットさせ、トーキーでは『ザ・バンク・ディック』(1940)などで成功を取めるというように、時代の境目を上首尾に渡り切ることができた。RH



- 1 サイレント映画の伝説的瞬間——ハロルド・ロイドが『要心無用』で街路上空の時計盤からいきなりぶら下がる。
- 2 『キッド』で詐欺師コンビを演じるチャールズ・チャップリンとジャッキー・クーガン。
- 3 『曲馬団のサリー』のポスター。ユースタンス・マッガール教授を演じるW・C・フィールズが描かれている。

■ 主な出来事

1909	1910	1912	1914	1915	1917	1919	1921	1923	1925	1926	1936
ロスコー・「デブ君」・アーバックルが短編コメディ『ベンス・キッド』で俳優デビューを飾る。	チャップリンがフレッド・カーノー劇団とともに初のアメリカ巡業を行う。後に再度アメリカの地を踏み、マック・セネットと契約を結ぶ。	マック・セネットがカリフォルニア州エデンデールにキーストン・ピクチャーズを設立する。サイレント喜劇を産業規模で展開する。	チャップリンの「放浪者(トランプ)」が『ヴェニスの子供自動車競走』で銀幕デビューを飾る。	W・C・フィールズが『ブルー・シャークス』で脚本・主演を手がける。これが彼の俳優・脚本家としてのデビュー作となり、ヴォードヴィルの経験が披露する場となる。	マック・セネットがキーストン・ピクチャーズを去り、新たに会社を設立する。サイレント期における「終わりの始まり」を予感させる。	俳優たちがこれまで以上に芸術面に関して主導権を握れるようにと、チャップリンが他のハリウッドスター数名とともにユナイテッド・アーティスト社を設立する。	ヴァージニア・ラッペとの醜聞が引き金となり、「デブ君」・アーバックルは瞬間に仕事を失っていく。	ハロルド・ロイド主演、ハル・ローチ制作の『要心無用』が公開される。	チャップリンが『黄金狂時代』(→p.64)を公開する。彼の作品中最も成功した伝説的作品となり、サイレント映画の中でも最高レベルの興行収入を上げている。	キートンが『キートンの大列車追跡』(→p.66)の制作を終える。当初は酷評されたが後に再評価され、サイレント時代の最高傑作の一つとして受け入れられる。	世界初のトーキー作品から10年近くを経て、チャップリンが彼にとつての初トーキー作品『モダン・タイムス』を公開する。本作に入っている音声は効果音のみである。

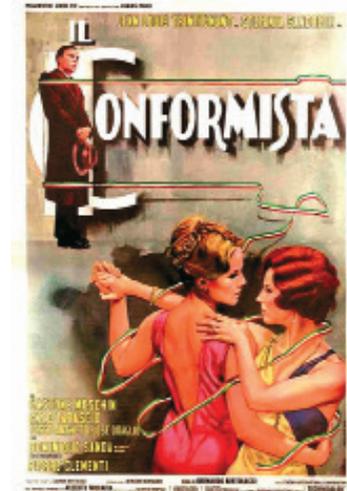
暗殺の森 ■ Il conformista 1970

ベルナルド・ベルトルッチ | BERNARDO BERTOLUCCI 1941-



▲ 矛盾に悩む男マルチェロ・クレリチが婚約者を訪ねる場面。

▼ 暴力と性とマルチェロの保守的な生来の性質がストーリーを進めていく。



ベルナルド・ベルトルッチの『暗殺の森』は知的サスペンスであり、ネオノワールでもある。原作はアルベルト・モラヴィアの1930年代を舞台にした小説。裕福だが深い自己矛盾を抱えるイタリア人官僚マルチェロ・クレリチが自ら進んでファシスト党の暗殺者になるストーリーを自在に翻案している。ベルトルッチは魅惑的な映像と、的確に積み重ねた知的要素によって、実験的であり政治的である映画を作りあげた。

ガストーネ・モスキンはクレリチの護衛を務めるファシスト党員マンガニエーロ役に危険な道化的要素を加え、ドミニク・サンダはクレリチの大学時代の恩師であり暗殺の標的であるクアドリ教授の妻アンナを演じて、誘うような官能性と心のもろさを醸し出している。また、ジャン＝ルイ・トランティニャンは人当たりのよさと、気取らない知性と、感情を隠している雰囲気クレリチにぴったりで、分裂した母国の暴力的な歴史や、殺人や性に対する罪悪感や、裕福な生い立ちや精神的に不安定な両親のおかげで得た怪しげな特権によって、まともな人生から切り離された男の迷いをうまく形にしている。

ベルトルッチは原作の時系列を捨て、入り組んだフラッシュバックを用いることで、精神的な深さや、夢に見える演出や、粉々になった象徴的意味をファシズムの表現に加えている。また文学や映画の引用や暗示を多用することで、イタリアのファシズム信奉者の過去や、その現代への遺産や、政治への関与に潜む複雑な動機を幅広く追究している。WH

👁 見どころ



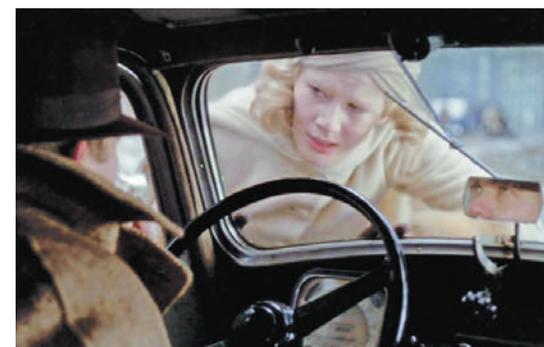
1 殺し屋の影

クレリチはパリのホテルの外でファシスト党員の暗殺共謀者マンガニエーロを待っている。フランスに亡命した標的、反ファシスト扇動者クアドリ(エンツォ・タラシオ)が逃げたのだ。クレリチはクアドリを追跡しながら、悩み続けてきた過去の重大な出来事を思い出し、その記憶がフラッシュバックで挿入される。



2 父親的存在

パリでクアドリを見つけると、クレリチは恩師の前で、現実と幻想のたとえとしてプラトンの洞窟の比喩を暗唱する。感銘を受けたクアドリは本物のファシストの口ぶりではないと言い、かつての教え子に抱いていた信頼を取り戻す。



3 「ブルータス、おまえもか」

クレリチとマンガニエーロは人里離れた冬の森でクアドリに追いつく。クアドリが複数の暗殺者に刺される場面はシェイクスピアのジュリアス・シーザーの暗殺場面を思わせる。アンナは車に乗ったクレリチに助けを求めるが、救われることなく殺害される。

🕒 ベルナルド・ベルトルッチ

1941-63

イタリアのパルマで生まれる。文芸評論家の父に映画監督でありマルクス主義の同志であるピエール・パオロ・パゾリーニを紹介され、映画『アッカットーネ』(1961)の撮影に参加。監督第1作『殺し』(1962)はパゾリーニの原案。

1964-70

『革命前夜』(1964)、『ベルトルッチの分身』(1968)、『暗殺のオペラ』(1970)、『暗殺の森』で急進左翼的な思想への関心とフロイト的強迫観念を追究し、国際的に高く評価された。

1971-77

『ラスト・タンゴ・イン・パリ』(1972)で高い評価を得て商業的な成功を収め、露骨な表現で世界的に有名になる。高額な制作費をかける大作に転向した『1900年』(1976)の興行成績は振るわなかった。

1978-93

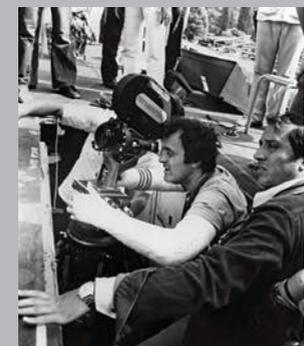
『ルナ』(1979)でイタリア人脚本家クレア・ペプローと組み、その弟マーク・ペプローとプロデューサーのジェレミー・トーマスとともに『ラスト・エンペラー』(1987)を制作し、アカデミー作品賞等を受賞。『シェルタリング・スカイ』(1990)、『リトル・ブッダ』(1993)とあわせて(東洋3部作)と呼ばれる。

1994-

商業的にはあまり冒険しなくなったが、イタリアのトスカーナを舞台にした恋愛映画『魅せられて』(1996)や1968年への賛辞である『ドリーマーズ』(2003)など、個性的な作品を撮りつづけている。

青の映画

ベルトルッチは『暗殺の森』で一緒に仕事をした多くの仲間と、長く付き合うようになった。その一人が撮影監督のヴィットリオ・ストラローロ(下)で、合計8本の映画をともに撮影した。ベルトルッチがストラローロと話し合ったのは、主に光と色と構図についてだった。ベルトルッチはレンズとカメラの動き、そしてカメラと登場人物の関係については自分が選択するが、「その他のことはすべて撮影監督の領域だ」と語っている。『暗殺の森』はストラローロに「青という色が伝える感情、その印象を発見する機会」を与えたのだ。青の冷たい色調とそこから連想される印象は作品全体に行き渡っている。それがパリで撮影された場面



の赤の温かみと、イタリアの町サバウディアに置かれた、ファシストが建てた建物の“セット”の途方もない巨大さとの対比を引き立て、1930年代イタリアのファシズム様式を映像で再現している。